陽明学関係書　紹介と短評

○古川　治著『淵　岡山』（シリーズ陽明学・21）

平成十二年三月、明徳出版社刊。B6版、254頁。

淵岡山については、井上哲次郎の『日本陽明学派の哲学』で、中江藤樹の門人として、熊沢蕃山とともに併称されているにしては、その人と思想については殆ど知られていない。というのも、これまで高瀬武次郎の「隠れたる陽明学者淵岡山先生」（『史林』二―二、大6）、柴田甚五郎の「藤樹学者淵岡山と其学派」（『帝国学士院紀要』一―一、一―三、四―一、昭17、18、21）の他は、『藤樹先生全集』の別冊があるのみで、近年、木村光徳著『日本陽明学派の研究―藤樹学派の思想とその資料』（昭和61年10月、明徳出版社）によって全貌が明らかになったが、一般に啓蒙するものはなかった。

本書は、岡山の人と思想を知るのに恰好の書である。内容は次のような構成である。

〈解説〉一、淵岡山の生涯。二、思想内容。三、岡山の学問の影響。

〈本文〉一、岡山の示教録。『岡山先生示教録』巻一―七、及び雄山照海の追加の文の解釈と解説。

二、岡山学の影響と展開。ここには、岡山学の地方における文書の解説と解釈。(1)大阪学派。(2)美作学派。(3)伊勢学派。(4)江戸学派。(5)会津学派。(6)熊本学派。(7)江西（岡山）と熊沢蕃山。○「むすび」で著者古川氏は学説の要点のまとめをしている。

○望月高明著『池田草庵』（シリーズ陽明学・30）

平成十三年六月、明徳出版社刊。B6版、223頁。

著者の池田草庵に対する立場は、呉康斎の亜流として把えるもので、それは長崎の崎門学派の儒者楠本碩水が、池田草庵のことを大橋訥庵から、「その人となりもまた康斎の流亜なり」と評された言葉に基づくものである。楠本碩水も池田草庵のひととなりを知りたいと思って、但馬を訪れて、実感したことを『日録』に残している。

〈解説〉池田草庵については、既に過去の研究があって、それに加えるものがないので、前記呉康斎の亜流としての草庵を、楠本碩水の言葉を中心に描いている。（但し、この内容は『陽明学』第11・12号に掲載した著者の「池田草庵―康斎の流亜」（上下）に基づいている）

〈本文〉(1)草庵の文から、康斎の亜流であることを見いだすための文と書簡。(2)満福寺出奔に関する文と語録。(3)読書講学に関する文と書簡。（林良斎、吉村秋陽、吉村斐山、楠本碩水宛）(4)黙坐修静に関する林良斎宛の書簡。ここには劉念台の「訟過法」や高忠憲の「復七規」などが余説として取り上げられている。

本書は、テーマにそって選択された文や書簡の訳もさることな

がら、注釈を含む解説に興味あるものがあり、思想の理解を深めるのに役立つ。但し、このての本には必ず付く凡例がないので、底本として、本文がなにから採録されているか分からない。その上、参考文献目録もなく、引用文についても頁数の記載があっても、その所収本や出典が示していないので不備と言えよう。また劉念台の訟過法について、著者は口語訳をして冗長になるのを避けて、書き下し文にして原文の香気を感じるためにしたというが、著者の師である岡田武彦先生の『劉念台文集』（中国古典新書）に、原文、注と解釈が全文収められていることなどの注記が必要であり、その他細かい点についての言及はさしひかえるが、本書を読んで、興味をもった人が、もっと深く読むための配慮がほしいところである。参考文献は、筆者の「叢書日本の思想家」（44）の『池田草庵』の参考文献を参照してほしいところだが、昭和62年の刊行のため、新しい研究文献は収めていない。また『陽明学』第11号が「池田草庵特集号」なので、それをも繙かれるとよい。

○呉　震　著『聶豹　羅洪先　評伝』

（匡亜明　主編「中国思想家評伝叢書」）南京大学出版社刊。二〇〇一年七月、初版。A5版、423頁。

王陽明の没後、陽明後学は現成派、修証派、そして帰寂派という三派に分かれたが、なかでも現成派は人間の持つ良知に対する全面的な肯定の激しさの持つ魅力から、研究も盛んに行われた。それに対し、中道的な修証派や現成派と対極的な帰寂派はあまり注目されず、研究も少ない。

本書で取り上げている聶豹・羅念庵は、黄宗羲が『明儒学案』で、「江右王門学案」に入れている帰寂派の代表的人物で、中でも羅念庵を比較的高く評価している。

第一章の序説は、陽明後学の概説で、先ず後学三派について述べ、其の後に現成派、修証派についてやや詳しく述べている。第二章は、帰寂派の代表的思想家の聶雙江についての「聶豹論」であり、彼の「帰寂」「致虚守静」等の学説について、第三章は同じく帰寂派の思想家羅念庵についての「羅洪先論」であり、彼の「守静無欲」「収摂保聚」等の学説について述べている。

附論に、これまで充分に評価されていなかった帰寂派の最後の思想家の大物である王時槐の思想について詳細に論じた「王時槐論」が収められている。

本書の特色の一つは、著者が京都大学に留学した際に、博捜した聶豹、羅洪先らのテキストをふまえていること、また日本人の研究、例えば楠本正継、岡田武彦、島田虔次、荒木見悟等著書、論文をはじめ「陽明学大系」などまでを繙いてふまえている。

附録に、「聶豹年譜」と「羅洪先年譜」があり、ともに三十余頁もある詳しいもの。聶豹にはこれまで年譜は見当たらないし、羅洪先のも、黄秀文編の『中国年譜辞典』（百家出版社）によると、以前に銭穆によって編まれたものがあるようだが、未見であり、入手が難しいようであることを考えると、役立つことは確かである。また附録にある「著述考」は、中国のテキストから日本に伝わった内閣文庫や京都大学蔵等のものについてまでを述べている。